

## ▶ ゴリアット (GOLIATH) = フランス

せん4歳・鹿毛 (ドイツ産・2020年2月27日生まれ)

父: Adlerflug = 母: Gouache (母の父: Shamardal)

馬主 : レザルト・ブラッドストック&フィリップウルマン男爵

調教師 : フランシス・グラファール

騎手 : クリストフ・スミヨン

戦績 : 全10戦6勝、2着2回

総獲得賞金 : 約1億6,780万円

主な戦績 : '24 キングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークス (G1) 1着

'24 コンセイユドパリ賞 (G2) 1着

'24 エドヴィル賞 (G3) 1着

ゴリアットはシュレンダーハン牧場の生産馬で、同牧場の生産所有馬であった父アドラーフルーク(その父インザウイングス)は現役時に独ダービーやドイツ賞といった G1 を制し、凱旋門賞馬トルカータータツツや、独ダービー優勝で凱旋門賞 2 着のインスウープ、バイエルン大賞を勝って 2015 年のジャパンカップ (18 着) に来日したイトウ、バーデン大賞の優勝馬で 2016 年と 17 年のジャパンカップで 7 着、15 着だったイキートスなどの産駒を輩出。ドイツのチャンピオンサイアーにも輝き、ゴリアットが生まれた翌年の 2021 年 4 月に 17 歳で死亡しました。

母のガッシュ(その父シャマール)はリストッド競走の勝馬で、その半兄のガルディーニ(父ダラカニ)は、フランスの G3 リス賞、ドイツの G2 ゲルリンク賞、オーストラリアの G3 である JRA プレートなどを優勝。祖母のグアンタナはリストッド勝ちがあり、曾祖母のグアダルヘは伊オークス優勝、伊ジョッキークラブ大賞とヨークシャーオークスでそれぞれ 2 着。牝系からはバーデン大賞、バイエルン大賞を制し、2017 年のジャパンカップに参戦(9 着)したギニョール、バイエルンツホトレネン優勝のジュリアーニなどが出ています。

シャンティイ調教場に厩舎を構えるフランシスアンリ・グラファール調教師に託されたゴリアットは 2 歳時に去勢され、3 歳になってデビュー。バウルジャン・ムルザバエフ騎手とのコンビで昨年 5 月のサンクルー競馬場、芝 2,400m 戦に臨むと、4 番手から残り 200m で抜け出して 1 馬身 1/4 差で快勝。続くクレールフォンテーヌ競馬場のクラス 2 戦(芝 2,400m)も直線に入って程なくして先頭に立ち、後続の追撃を 3/4 馬身抑えて連勝を飾りました。次いでクレールフォンテーヌ大賞(クレールフォンテーヌ、リストッド、芝 2,400m)も直線の競り合いを短クビ差制して連勝を 3 に伸ばしましたが、その後、マキシム・ギュイオン騎手が配されて重賞初挑戦となったフランスドランジュ賞(パリロンシャン、G3、芝 2,000m)は後方から伸びきれずに 4 着まで。このシーズンを 4 戦 3 勝で終えました。

今年は 4 月のロードシーモア賞(パリロンシャン、リストッド、芝 2,400m)から始動。ここはクリスチャン・デムーロ騎手を鞍上に道中で前が詰まる場面もありガラシールズの 2 着でしたが、ギュイオン騎手で臨んだエドヴィル賞(パリロンシャン、G3、芝 2,400m)はスローペースで逃げて、直線で後続を寄せ付けずに 3 馬身差で完勝、デビューから 6 戦目で重賞勝馬となりました。続く 6 月のシャンティイ大賞(G2、芝 2,400m)はウィリアム・ビュイック騎手を鞍上に迎えたが、後方から 4 着まで。ロイヤルアスコット開催で行われたハードウィックステークス(G2、芝 2,390m)では再びギュイオン騎手とのコンビに戻り、内の 3 番手追走からじわじわと伸びたものの、勝ったアイルオブジュラには 3 馬身 3/4 の差をつけられて 2 着でした。

コースの所々が軟化した馬場(発表は良)を舞台に行われたキングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークス(アスコット、G1、芝 2,390m)に 9 頭立ての 7 番人気タイ(単勝 26.0 倍)で出走すると、クリストフ・スミヨン騎手との初コンビで 5 番手の外を追走。直線で先に抜け出したレベルスロマンス目掛けて一気に襲いかかると、すぐさま先頭に立って残り 200m は独走状態、見事にジャイアントキリングを演じました。2 馬身 1/4 差の 2 着にゴリアットの後ろから脚を伸ばした後の凱旋門賞馬ブルーストッキング、良馬場の勝ちタイムは 2 分 27 秒 43 でした。ドイツ人所有馬による制覇は 2012 年デインドリーム、2013 年ノヴェリストに次ぐもので、フランス調教馬の優勝は 06 年のハリケーン

ラン以来のことでした。ドイツのフィリップ・ウルマン男爵の所有名義に、アメリカのジョン・スチュワート氏が加わったのはこの後のことです。

去勢馬で凱旋門賞に出走資格のなかったゴリアットは、ドイツのオイロパ賞を経てジャパンカップに向かう予定とされていましたが、一頓挫あってこれを回避し、10月20日のコンセイユドパリ賞（パリロンシャン、G2、芝2,200m）に照準を向けました。前走に続いてクリストフ・スミヨン騎手が騎乗し、外の3〜4番手から残り400mを過ぎて先頭に立つと、競り掛けてきたヘイミッシュを半馬身制して1番人気に応えました。

キャリア10戦のうち8戦が芝2,400m(2,390m含む)で、全6勝のうち5勝を同距離で挙げています。左回りはデビューの1戦（サンクルー競馬場で優勝）のみ。良馬場で2戦1勝、2着1回、稍重で3戦2勝、重と不良馬場で5戦3勝、2着1回と、どのような馬場でも満遍なく結果を残しています。芝2,400mの持ち時計は“キングジョージ”で記録した2分27秒43（良馬場）です。11月10日までのレースが対象のロンジンワールドベストレースホースランキングでは、レーティング125で世界4位タイ、芝のL部門（2,101m〜2,700m）ではレバルスロマンス（123）を上回ってトップです。“キングジョージ”勝馬の同一年のジャパンカップ参戦は2009年のコンデュイット（4着）以来で、11年のジャパンカップで6着だったデインドリームが翌年の“キングジョージ”を制しています。



2024年キングジョージVI世&クイーンエリザベスステークス

(Photo: Edward Whitaker)

## ● 馬主：レゾリュート・ブラッドストック&フィリップウルマン男爵 (Resolute Bloodstock & Philip Baron Von Ullmann)

レゾリュート・ブラッドストックは、アメリカの投資会社ミドルグラウンドキャピタルの創設者兼共同経営者であるジョン・スチュワート氏が所有する競馬法人です。同氏が昨年設立したレゾリュートレーシングは、ケンタッキー州の旧シャダイドスタッドの敷地を購入し、競走馬の所有だけでなく生産にも取り組んでいます。レゾリュートレーシング名義の所有馬にヒアカムズザブライドステークス(G3)、レイクジョージステークス(G3)勝ちのパウンス、共有馬にニューヨークステークス(G1)優勝馬のディディア、ブルーグラスステークス(G1)2着のジャストアタッチなどがあります。

フィリップウルマン男爵の父は、1869年に銀行家であったエドゥアルト・フォン・オッペンハイム卿が設立した、ドイツで最も古いシュレンダーハン牧場のオーナーを務めるゲオルク・フォン・ウルマン男爵です。ケルン近郊のベルクハイムに位置するシュレンダーハン牧場は、馬主および生産者部門のリーディングに30回以上輝く名門で、近年の主な所有馬に2020年独ダービー馬で凱旋門賞2着のインスウープ(グラファール厩舎)、2021年ガネー賞優勝のマレオーストラリスなどがあります。これまでのジャパンカップでは、シュレンダーハン牧場名義のアイヴァンホウが2014年に6着、イトウが2015年に18着、ゲオルク・フォン・ウルマン男爵名義のタイガーヒルが1999年に10着、シュタル・ウルマン名義のギニョールが2017年に9着となっています。

## ● 調教師：フランシス・グラファール (Francis Graffard)

1977年4月27日生まれ、パリ南東のシャロレー＝ブリオネ地方出身。調教師になるため、アイルランドのJ.オックス厩舎やフランスのJ.ベルトラン・ド・バランダ厩舎のほか、フランスのアルカナ社系列のセリ会社ゴフスなどで経験を積みました。また、人材養成プログラム「ダーレー・フライング・スタート」の一期生として、フランスのA.ファール厩舎やオーストラリアのG.ウォーターハウス厩舎でも学び、調教師になる前の3年は自国の大御所A.ドゥロワイエデュプレ厩舎でアシスタントを務めました。

2011年秋にシャンティイ調教場のラモレー地区に厩舎を開業し、最初のシーズンとなった翌12年はパールフルートでシェヌ賞(G3)を制して重賞初勝利を飾るなど158戦24勝で、獲得賞金順のリーディング61位。2015年以降はリーディング15位以内を維持しており、これまでの最高位は22、23年の3位となっています。初のG1タイトルは2015年のパリ大賞(イラプト)で、以降、16年カナディアンインターナショナル(同)、17年ヴェルメイユ賞(バティール)、19年仏オークス(チャンネル)、コロネーションステークス(ウオッチミー)、20年独ダービー(インスウープ)、ロートシルト賞(ウオッチミー)、アベイドロンシャン賞(ウッディ)、クイーンエリザベスII世ステークス(ザレヴァント)、22年ヴェルメイユ賞(スウィートレディ)を優勝。今年はいギリスにおいて本馬で“キングジョージ”を制したほか、自国では11月14日現在、仏1000ギニー(ルーヒヤ)、マルセルブルーサック賞(パーティカルブルー)と2つのG1を含む446戦108勝、獲得賞金386万1,560ユーロ(約6億340万円)でリーディング2位です。

日本での管理馬出走は、イラプトで2度参戦したジャパンカップ(2015年6着、16年14着)以来のこととなります。

## ● 騎手：クリストフ・スミヨン (Christophe Soumillon)

1981年6月4日生まれ、ベルギーのブリュッセル出身。父のジャン・マルクは障害騎手として活躍、自身はフランスのC.ブータン厩舎の見習騎手として1997年にデビューし、99年に見習騎手チャンピオンに輝くと、続く2000年にはプロ騎手に転向して68勝を挙げリーディングトップ10入りを果たしました。以降は毎年リーディング10位内につけ、2003、05、06、11～15、17、18年に最多勝利騎手に贈られるクラヴァシールドを獲得。2017年に挙げた305勝はシーズン勝利数のヨーロッパ記録を更新するものでした。

2001年に仏2000ギニーでG1初勝利を飾ると、ここまで数多くのG1勝鞍を手中にしています。国内では仏2000

ギニー3勝、仏ダービー2勝、仏1000ギニー5勝、仏オークス2勝、国外でも愛オークスや伊オークス、独ダービーでクラシックタイトルを獲得。主な騎乗馬に2003年の仏ダービーや凱旋門賞を制したダラカニ、04年の独ダービー馬で翌年のブリーダーズカップターフ覇者のシロッコ、06年の“キングジョージ”優勝馬ハリケーンラン、08年の仏オークスや凱旋門賞を勝った名牝ザルカヴァ、11年英チャンピオンステークスなどのシリウスデゼーグル、16年の英愛チャンピオンステークスを制覇のアルマンゾル、18・19年にドバイワールドカップを連覇したサンダースノー、22年の仏ダービー、エクリプスステークス勝馬ヴァデニなどがいます。今年の本馬で“キングジョージ”を勝ったほか、10月31日までの対象のフランス騎手リーディングでは、G1のロワイヤリュウ賞(グレイトフル)とジャンリュックラガルデル賞(カミーユピサロ)を含む441戦65勝で9位でした。

日本では2001年にJRAの短期免許を取得して初騎乗。2009年にスワンステークスでJRA重賞初勝利を挙げると、翌年にブエナビスタで天皇賞(秋)、14年にエピファネイアでジャパンカップ、19年にラッキーライラックでエリザベス女王杯を制して日本でGI・3勝の実績があります。ワールドスーパージョッキーズシリーズには2003年(総合12位)、10年(8位タイ)、12年(9位)、14年(12位)と4回出場。ここまでのJRA通算成績は358戦64勝。また、2019年には日本のアドマイヤマーズで香港マイルも制しています。